

2022年9月11日

神の導かれた歩み

申命記8：2～10

・高齢者祝福礼拝を捧げる

本日の礼拝は、高齢者祝福礼拝として行います。この礼拝を行うようになったきっかけがあります。そもそも、9月に高齢者をお招きして感謝の昼食会である「香柏会」のみを行っていました。それで、せっかくの機会なので、朝の礼拝でもそのことを覚える礼拝を行うようにしたいとの願いから始まりました。今年もコロナ対応で礼拝後の「香柏会」を行うことができませんが、再開できる時を望みつつ、今日は高齢者祝福礼拝を行ってきたいと思います、

教会で、このような機会を持ち、長くキリスト者として人生を歩まれた方々をお覚えることは、この時期に一般に行われる「敬老会」と呼ばれる催しとは、全く違った意味を持っています。この礼拝で確認するのは、そうして、長くキリスト者として歩まれた方々の姿は、後に続く世代への大切なメッセージとなっているということです。この礼拝において、特にお覚えしています教会員の方々は、キリスト者として歩みを重ねられました。それは、勿論、それぞれの方々が懸命に歩まれた歩みでありませんが、もう一つ大切なことが示されている歩みでもあります。それは神様が導かれた歩みであるということです。そうして、実際に歩まれた姿です。ですから、それは、教会の後に続く世代に対する大切なメッセージなのです。神様は、いかに豊かな導きをもって、それぞれの方々を導かれたのかということです。そして、その方々も、そして、後に続く世代も、その道をこれから歩み続けていくということです。

今日のこの礼拝では、「神様が導かれた歩み」の姿を、共にこの申命記の言葉に聞くことを通して、受け止めていきたいと思います。

・荒れ野の旅路の意味

エジプトで奴隷の生活を送っていた神の民であるユダヤの人たちは、モーセをリーダーとして、エジプトから脱出をします。そして、40年にわたって荒れ野を歩み続けて、神様が約束された到着地、約束の地へと入ろうとしています。その時にモーセは、改めてこれまで歩まされてきた荒れ野の旅路の全行程を振り返るのです。そこで自分たちは一体何を与えられたのか、確認をするのです。

モーセたちの荒れ野の旅路の全体を振り返ってみて、まずそこに示されているもの一体何だったのでしょうか。「あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い

起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわちご自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。(2節)」ここに、「苦しめて試し」とあります。40年の荒れ野の旅を振り返ってまず示されるのは、その歩みが苦難に満ちた歩みであったということです。荒れ野を歩いていく中で、様々な苦難や困難に直面してきたということなのです。様々な苦難や困難に直面しながら歩んだ40年であったということなのです。

しかし、その苦難に満ちた40年の歩みは、単に苦しんだだけの歩みではなかったのです。ここに、「試し」とあります。神様はモーセたちを試された、試みられたのです。「試し」と言われていますので、神様がモーセたちに苦難に満ちた40年の歩みを歩ませていくことは、決して苦しめることが目的ではありませんでした。「試す」という言葉は、いろいろ試してみてそれが何か分かるようにするというような意味合いの言葉です。例えば、化学の実験などで使われる「試薬」。ここに何か分からない液体があるとします。それが何か調べるために、試薬を使うのです。この薬に反応したからこういう液体だとか、こういう色になるからこの液体が何か分かるとか、そうして、この試薬を通してそのものが何であるか分かるようになるのです。同じように、神様は試みるわけですから、この苦難を通して何かを明らかにしようとするのです。モーセたちが、結果として今ぼんやりとしてしまっているものをはっきりとさせるために、この苦難が与えられたということなのです。

では、神様はこの苦難を通して、一体何を明らかにしようとしたのでしょうか。ここに「あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。」とあります。神様は、モーセたちの心のうちに何があるか知ろうとされたのです。つまり、神様の戒めを守るかどうか知ろうとされたのです。こう聞くと、皆さんはどう思われるでしょうか。まずは、戸惑われるのではないかと思います。私自身、こんなに厳しいテストに自分は耐えられるだろうかと思いました。神様は、苦難の中でもちゃんと神様の言葉を守るかどうか、そのことを判定するために苦難を与えられたのだったら、誰がそのテストに合格できるだろうかと思います。

そして、いろいろな方からこういう趣旨の言葉をお聞きすることがあります。「苦難に直面した時、とても神様のことを考える余裕はなくなっていました」と。これは、苦難の中を歩む時の、私たちの正直な姿であると思います。そうしますと、苦難を与えた神様の試験に合格する人はなかなかいない、そういうことになってしまいました。しかし、神様はそういう意味で、苦難を与えたと言われているのでしょうか。

私たちは、神様に支えられています。そのことは、言葉としては十分に分かっているつもりです。しかし、それをどうしてももう一度受け止め直さなければならなくな

る時があります。それは、思いもしない現実や厳しい苦難に直面した時です。その苦難の中を歩む時に、改めて本当に自分は神様に支えていただいているのだろうか、神様はこのような状況の中を歩む私と本当に共にいてくださっているのだろうか、神様は一体何を考えられているのか、この状況で恐れ迷っている私たちをどう見ておられるのか、考えざるを得なくなります。私自身そうでした。本当に辛い経験の中で、神様が私を支えてくださるとはどういうことか、本当の意味で自分の問題になったように思います。そして、その時にはっきりと示されるのは、自分は本当には「神様に支えられている」ということが分かっていなかったのではないかということなのです。何か、非常にぼんやりと受け取っていたということが示されてきたように思うのです。

実は、モーセたちもそうでした。神様の思いもしない御業によって、荒れ野の旅に進み出ます。そうして、奴隷として苦難に満ちた歩みをしていたエジプトを脱出出来たら、それこそ夢のような日々が始まったのかと言えば、勿論そうではありませんでした。すぐに食べ物尽きてしまいます。また、水にも事欠く歩みが続くことになりました。彼らがその時歩んでいるのは、道もはっきりしない荒れ野です。先の全く見えない旅です。彼らは、そこに追い込まれてしまったのです。ある人たちは、「エジプトに帰った方がましだ」と声を上げるような状況です。それは、危機以外の何ものでもないのです。その中を歩いていかなければならないのです。自分たちはこれからどうなっていくのだろうか、本当にこの旅を歩む抜くことができるのだろうか。そういう思いの中での一歩、また一歩だったに違いありません。つまり、モーセたちは、自分たち自身で、この荒れ野の歩みに意味を見出すことは出来なかったのです。それこそ、砂をかむような思いだったに違いありません。しかし、そうして歩んだ荒れ野の旅を通して、神様は大切なことをモーセたちに明らかにされたのです。

・主の言葉によって生きる

神様が荒れ野での苦難に満ちた旅を通して、モーセたちに示されたのはこういうことです。「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることあなたに知らせるためであった。(3 節)」と。注目したいのは、この言葉は、直接は荒れ野の歩みを振り返っているモーセの言葉です。彼は、本当に知らされたのです。心底知らされたのです。荒れ野の旅路は、神様によって生かされていた歩みであったということ。そのことを発見させられた、驚きの言葉なのです。自分たちが歩んできた荒れ野の旅は、自分たちには単なる苦しみに見えていたけれども、結局主の言葉によって生かされた歩みであったということなのです。

「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」、この言葉は一般的にも大変よく知られている言葉です。しかし、よく知られているのからこそ、とても誤解もされている言葉だとも思います。この言葉は、食べ物のことを考えるようではだめで神様のことを考えて生きなければならない、私たちの欲というものを大変強く問うている聖書の言葉として、受け止められているように思うのです。しかし、この言葉は、そういう私たちが常識的に捉えているようなことを示している言葉ではありません。モーセは、全く違ったことを示しているのです。

モーセは、パンのことなど考えるな、食べ物のことなどどうでもよい、と言っているのではありません。「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。」、モーセたちは、空腹だけれどもパンのことは考えずに一生懸命歩もうと思って、その空腹に耐えながら荒れ野の旅を歩んだのではありません。彼らは、ちゃんと食べ物を得ることができたのです。神様が必要な食料を「マナ」という形で与えてくださったからです。荒れ野の旅路の間、欠けることなく食べるものを備えらえたのです。それが、モーセたちの荒れ野の旅の姿だったのです。しかし、それは、単に食べ物を備えられて幸運だったということではないのです。本当に生かされていたのは、実は、マナという食物そのものではなく、「口から出る言葉」、つまり神様の言葉によって生かされていたと、モーセは言っているのです。

「主の口から出るすべての言葉」、神様は言葉を持って、私たちにご自身の御心を伝えてくださるのです。それは、「あなたを愛する」と御心です。私たちの命を生み出してくださった、私たちを創ってくださった神様は、創ったがゆえに愛し支えてくださるのです。愛するが故に、必ず支え持ち運ぶと決意されているのです。その御心を、神様は、私たち人間に言葉を持ってお伝えくださるのです。

モーセたちは、荒れ野の歩みに踏み出す前も「神様に支えられている」、そのことを言葉としては理解していたと思います。しかし、どこかで「パンによって生きている」、つまり、今自分が手にしているものによって生きていると思っている。やはり、自分の力で生きている、結局は自分で自分の人生を歩んでいるという思いの中に迷い込んでいたのです。しかし、この荒れ野で食べ物が尽きる、水が尽きるのです。そして、彼らの手の中が実際に空っぽとなったのです。その極限の状況の中へと追い込まれることになりました。では、その極限の状況の中で倒れてしまったのでしょうか。歩めなくなったのでしょうか。そうではなかったのです。その極限に見える状況の中を、神様に必要を満たされて、モーセたちはなおも旅を続けていくことになったのです。

神様がモーセたちを支えられた姿がこのように言われています。「この四十年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった。」、40年の困難な旅ですか

ら、当然、着物は古びて、足がはれるはずですが、しかし、本当に必要を満たされて、豊かに支えられて、40年の荒れ野の旅を歩み通していったのです。その歩みを振り返って、モーセは、自分たちが頑張って歩み通した歩みなどとは言えない。自分の命を最後の最後に支えているのは、結局自分ではなく神様であった。そう言う以外なかったのです。「神様が共にいてくださる」との言葉を、実感を持って受け止めることになったのです。本当の意味で、自分の言葉になったのです。それは、実際に荒れ野を歩んだからこそ、与えられたものなのです。そうして、神様の言葉、神様から言葉を持って示される御心、神様の愛によって生かされていたことを、深く心に刻んでいくことになりました。

ですから、荒れ野を歩むことを通して、モーセたちは大切なことを明らかにされたのです。それは、神様の戒めを守る大切さなのです。戒めとは、単に戒律のようなものを指しているのではなく、神様の言葉そのものを指しています。つまり、神様の戒めを守るとは、神様の言葉を、そして、神様が言葉を通してお伝えくださる愛を受け入れて歩むことです。そうして歩む以外に、本当の意味で自分が生きていく道はないことを、荒れ野の旅路を通して、深く受け止めさせられることになったのです。それこそが、神様が、モーセたちに40年荒れ野の旅を歩ませた真の意味だったのです。

・苦難の意味

そして、この恵みを知る時に、「あなたは、人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい。(4節)」、このことが分かるのです。苦難に直面するのは神様が自分をお見捨てになったからではありません。自分が神様の子どもであることを示しています。愛しているからこそ、苦難を与えられるのです。以前ある教会の教会員の方が、こういうことを言われたこととお聞きしました。苦難の中にいる時、苦難は試練、神様の訓練ですという言葉聞いた。しかし、それ最初とても反発した。自分の苦しさも分からずにどうしてこういうことを言えるのかと思った。けれども、時が経つうちに、そうかもしれないという思いに徐々に思いが変えられてきた。そして、振り返ってみれば、結局「苦難は試練」との言葉に救われたという思いが与えられた。その言葉がなかったとしたら、何故、どうして、その自分の心だけになっていたように思う、と。その方は、苦難には意味があったと受け止められたのです。それは、苦難を通して、神様が共にいてくださる恵みを深く受け止めることになったということなのです。

「あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい。」モーセは信仰に生きる者は、こう考えなければならないと建前で言っているわけではありません。モーセ

も苦難の中で、自分の本当の姿を知ることができたのです。それは、神様に支えられてある自分です。それを受け止めることができたのです。だから、モーセは言うのです。「あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい。」、この言葉を受け入れて歩みなさいと招いているのです。主の道を歩んでいた、危機の中でこそ、主の導きによって歩まされていることを受け止めさせられていくのです。そうして、自分たちが歩んできたことを知るのです。

モーセたちは、約束の地に入る直前に、この 40 年の歩みを振り返って、主の言葉によって、つまり、神様の支えと導きによって歩まされたことを確認しています。これは、これから素晴らしい地に入るのです。「あなたは食べて満足し、良い土地を与えてくださったことを思って、あなたの神、主をたたえなさい。(7～10 節)」、幸いに見える時が与えられるのです。しかし、それは新しい困難に直面するのです。この後の箇所で、「あなたは、『自分の力と手の働きで、この富を築いた』などと考えるはならない。(17 節)」とあります。ふと気を許せば、私たち人間は、今自分が手にしているものは自分の力で獲得したものという思いに迷い込んでしまうのです。だからこそ、モーセは、約束の地に入る直前に確認しなければならなかったのです。ここまでの 40 年の歩みは、ただただ神様の導かれた歩みであった、その時々に必要なを与えられて、その恵みの中に歩んだということなのです。その恵みを確認して、前に向かって進んでいくのです。

・神様の導かれて歩んだ歩み

そして、そのようにして、神様に導かれた歩んだ歩みは、モーセたちだけではなく、信仰の道を歩む全ての者が歩まされている姿であることを思います。そのことを、改めて思われる機会がありました。8 月に須賀羊子さんの納骨式を行いました。その場で、改めて須賀羊子さんの愛唱聖句である詩編 23 編をお読みしました。詩編 23 編の詩人は、「死の陰の谷」、つまり、死を予感させるような厳しい道を歩む時「主が私と共におられる」、このことが自分の希望であることを知らされたのです。その感謝が、詩編 23 編の言葉となっています。そして、詩編 23 編を愛された須賀羊子さんは、詩人が歩んだ道と同じように歩まれたことを思います。厳しい現実の中を神様に支えられて歩んできた、その思いを持っておられたことを思います。その思いが、詩編 23 編を愛唱聖句として挙げられていることに示されていたことを思うのです。

神様に導かれて歩んだ、その思いは須賀羊子さんだけではなく、多くの信仰の先達方の姿であることを思います。そして、高齢と呼ばれる年代に入っておられる多くの教会員の方々の実感ではないかと思います。モーセたちの荒れ野の 40 年のように、

その歩みは神様に支えられて導かれて、ここまで歩んできたということです。私たちの力だけでは乗り越えられないように見えた困難を、神様に支えていただいて歩み通させていただいたのです。

そして、私たちは、これから先も、決して平らかな道を歩いていくのではないことを思います。今、私たちの生きる社会は、本当に先の見えない不安の中にあります。社会全体に止まりません。私たち人一人一人のことを思っても、健康に対する不安、経済的な不安など、この先見通しは決して明るくないように思えます。しかし、私たちは、その中を、自分の力によって歩み抜いていくではありません。そのような状況の中を歩いていく真の力は、「あなたと共にいて支える」と約束してくださっている神様にこそあります。神様が支導いてくださる、その恵みの中に必ず置かれて歩いていきます。その確かなしるしは、私たちがこれまで歩んできた道筋です。モーセたちが経験したように、苦難の中を神様に支えられて歩んできたこれまでの日々の姿です。ですから、これから先もそうなのです。これまでと同じように、必ず支えられて歩いていくのです。「私はあなた共にいる、あなたを見放すことも見捨てることもない」、主の約束の言葉に生かされあることを改めて心に、主の導きの中をこれからも歩み続けていくのです。